

ペシヤワール会報

No. 15



羊の胴体を奪いあう騎馬民族の伝統的競技ブスカシを行うアフガン難民

ペシヤワール会は1983年9月、中村医師のパキスタンでの医療活動を支援する
目的で結成されました。彼の活動を支援するとともに、アジアの人々について
の理解を深めていきたいと願っています。

歴史の中、常に抗争の舞台に

一九七九年のソ連軍のアフガニスタン進駐以来、過去の英露の対立は米ソの対立としてむしかえされ、今なお当地の人々はその対立の犠牲となり続けている

中村 哲

ド世界、中国世界の交叉点にあたり、しばしばギリシャ、アラブの影響にもさらされた。近代になつてからは、英国とロシアの南方での抗争の舞台となり、両帝国によつてふみにじられた。

中央アジアと西南アジアは我々日本人の頭の中で、最も空白の部分の一つである。西域のロマンとアラビアンナイトと石油問題が、ごちゃごちゃになつていて、その実像を掴みにくい。

ヨーロッパ世界の繁栄するはるか以前から、ペルシャ世界とインド世界は古代文明の一大中心地

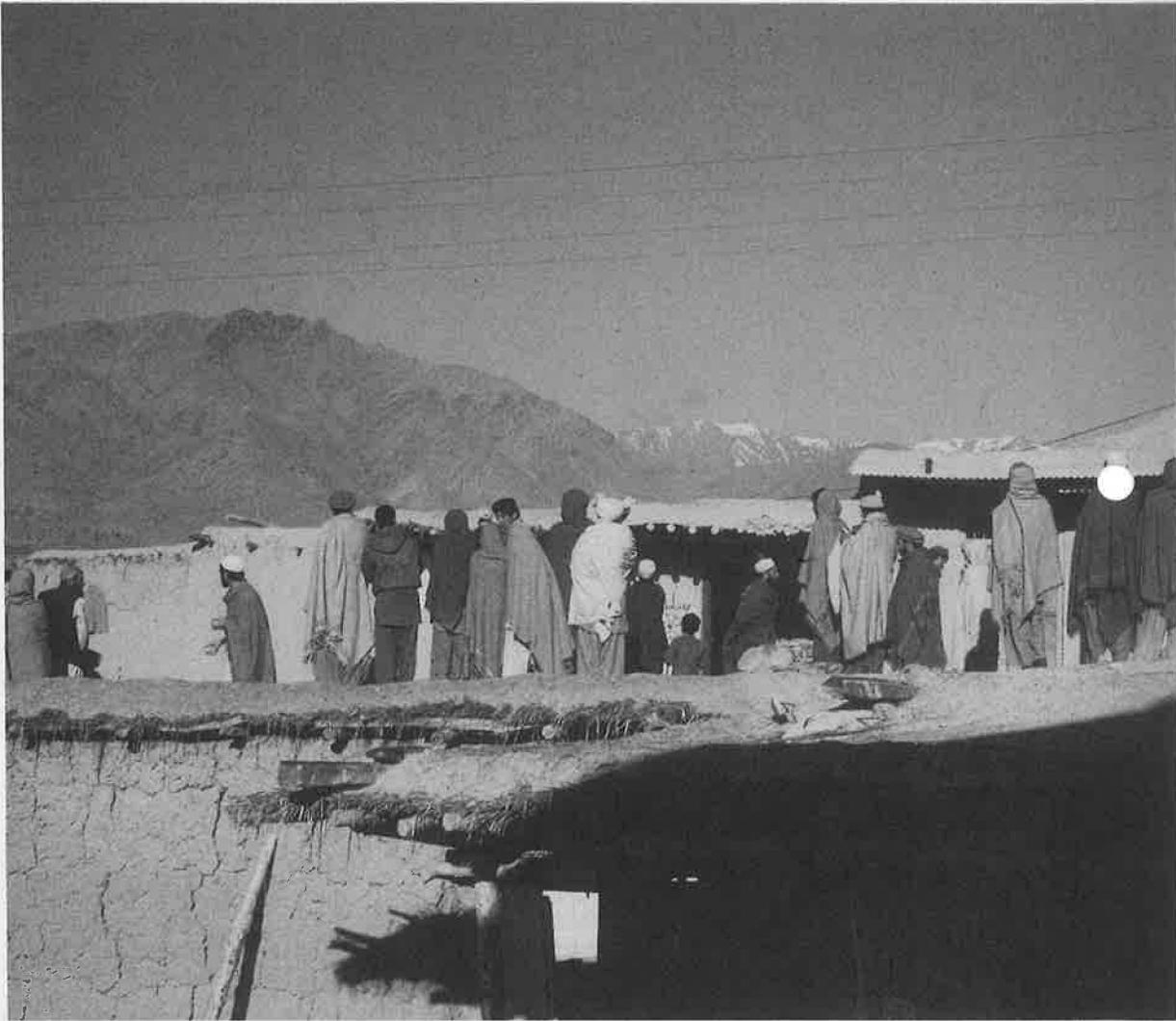
であつた。中央アジアはアーリアン民族の故地であり、多くの遊牧民族が盛衰をくりかえした、歴史の一大舞台である。

現在のペシャワールは、日本などよりずっと歴史が古い。サマルカンドから今のアフガニスタン、ペシャワールの地域は丁度、ペルシャ世界、イン



ペシャワールと北西辺境州は、英国のインド支配の最前線となり、三次にわたるアフガン戦争（一八四二、一八九〇、一九一九）で英国は敗退し、北進をあきらめた。現在のアフガニスタンとパキスタン北西辺境の国境はこのいきさつの中で全く人工的に定められた政治国境線である（一八八三、デュアランド・ライン）。

ロシアも南下してアフガニスタンの征服を企てたが、トルコ系の諸部族の激しい抵抗でその目的を果たさなかつた。この英露両帝国にアフガニスタン征服をあきらめさせたのは、日露戦争（一九〇



(1987年1月17日 バジヨワル)

五年)である。このことは日本でも余り知られていない。

しかし、一九七九年のソ連軍のアフガニスタン進駐以来、過去の英露の対立は米ソの対立としてむしろかえされ、今なお当地の人々はその対立の犠牲となり続けている。

ソ連軍機による爆撃を ながめるキャンプ住民

辺境の住民はしばしば難民と一体になって、ジハード(聖戦)に参加する。戦闘意欲は旺盛で(これが、男たちのいきがいでもあるが)まるで出勤でもするように国境を越え、ソ連軍のアフガン政府軍に襲撃をかける。ソ連軍のアフガン政府軍は国境沿いのキャンプはシャクの種で歩兵をバキスタン領内にすすめることはできず、しばしば越境爆撃が行われる。この種の報復爆撃は一九八五年頃から次第に頻繁に行われるようになった。



ペシャワール旧市街風景 キッサハーニー・バザール



真鍮細工の店(キャサハーニー・バザール)

真鍮細工もペシャワール名物。とくにペシャワールのサモワールは有名



スラム地区の住民たち(キリスト教区)

ペシャワールは内陸の国際都市で少数ながら、キリスト教徒、ヒンズー教徒、シーク教徒も居り、夫々コロニーを作って仲良く暮している。



なかむら・てつ 昭和21年福岡市生まれ。

福岡高を経て48年九州大学医学部卒。国内の病院に勤務したあと、パキスタンでの医療活動を志し、リバプールの熱帯医学校に留学、59年5月、ペシャワール・ミッション・ホスピタルに家族を伴って赴任。ハンセン病治療を中心にすでに五年間、現地で活動している。現在八歳、四歳、一歳の三人の子供がいるが「少なくとも長女が小学生でいる間は現地にどまりたい」と言う。

現地レポート

ペシャワールの55日

現地の人々と深くつきあう中村医師

ペシャワール会事務局

福島 裕助

1月11日から3月5日までの55日間、私が滞在したスポグメイ・ホテル(月の宿)は、ペシャワール旧市街のほぼ中心に位置しており、パキスタン、アフガニスタンの商人たちがよく利用する所謂「商人宿」であった。

民族衣装と極彩色

中村哲医師の活動するミッシヨン病院は、このホテルから歩いて10分程のところにある。ホテルの門を出ると、目の前には数十軒のサンダル工房が並んでいる。ハンセン病の足からの感染或いは患部の悪化を防ぐ目的で、中村医師は病院内にサンダル工房を設置されたが、その開設の際に足繁く通われたのがこのサンダル工房街である。近くにはカバープ(羊の焼肉)屋も多い。民族衣装のシャルワル・カミーズを着、チャダルをマントのように身にまとった人々が、リキシヤ(小型のオート三輪)の排気ガスと土埃で濛々とした旧市街の通りを往来している。洋服を着た人はほとんど見かけない。博多の繁華街では、ファッション雑

誌からそのまま抜け出してきたような艶やかな服装の女性をよく見かけるが、此処ペシャワールでは、博物館からそのまま逃げ出して来たような服装をした人々が街を闊歩しているのだ。

サンダル工房街を過ぎると寝具屋街が始まる。

ベッド、椅子、布団そして枕、そのどれもが赤、黄、緑という極彩色の派手なものばかりである。ギンギラギンに飾り立てたトラックやバスといい、この布団といい、その派手派手しさは、博物館級の人々の服装と対照的でまた面白い。

寝具屋街を抜けてしばらく歩くとミッシヨン病院が見えてくる。総レンガ造りのかなり大きな病院である。その中に中村哲医師の活動するハンセン病棟はあった。

腸チフスの縁

そもそも私がペシャワール会の会員になったのは、腸チフスがきっかけであった。昭和61年の10月、青年海外協力隊の稲作隊員としての活動を終え、マレーシアから帰国した私を待ち受けていた

のは熱い味噌汁ではなく、40日間の隔離生活だった。つまり検査の結果腸チフスに罹っていることが判明したのだ。しかし、人の縁というものは不思議なもので、その隔離病棟の看護婦さんがペシャワール会の会員であったのだ。

腸チフスをきっかけとしてペシャワール会の存在を知り、そしてとうとう中村医師のおられるハンセン病棟まで来てしまった。39度を超す発熱と40日間の隔離生活には苦しめられたが、今となっては腸チフスに感謝しなければならない。

現地スタッフへの講義と回診

中村医師は多忙である。以下に、ある一週間の活動状況を追ってみる。回教国パキスタンの一週間は土曜日から始まる。

土曜日。8時15分。ハンセン病棟で働く現地スタッフ4名を集めて、ハンセン病の病徴例とその処置法についての講義が始まる。中村医師は、現地スタッフの知識レベルの向上を図るべく、毎週土曜と火曜の朝、30分程の短かい講義を実行しておられる。英語とウルドゥー語による講義であり、ハンセン病に関する医学用語が頻繁に出てくるので私にはさっぱり分らない。しかし、スタッフは皆熱心に耳を傾け、メモをとっている。一通り説明を終えるとスタッフからの質問を受ける。スタッフは熱心に質問し、中村医師も真剣な眼差しで応答する。その眼差しには、我家に居て、一歳に

なつたばかりの次女美智ちゃんを抱いているときの、あのデレエ〜とした優しい目はなかった。

講義が終わると休む間もなく入院患者の回診が行われる。ハサミ、ペンライト、聴診器などの医者七つ道具を携えての回診である。「アツサラーム・アライコム!!(イスラムの挨拶)」、「スインゲ・イエー!!(これはパシュトゥー語。博多弁に直訳すると、調子はどげんね、という意)」と、中村医師はパシュトゥー語或いはペルシャ語で気さくに



中村医師とシャワリ医師(患者さんの結婚式)

声をかけながら、治療中の傷口を消毒し、ガーゼと包帯をつけ替える。それをアシストするのは、

看護師の資格をもつスタッフであり、時にはやはり入院中の他の患者さんだったりするのだ。彼らは互いに助け合っているのである。手足の指がない人、変形している人、鼻が陥没している人など症状は様々である。しかし、はじめ私が想像していたような悲惨さ、卑屈さは彼らの中にはなく、私が病棟に入入りするようになって二週間も経つと、気軽に「スインゲ・イエー!!」と微笑み、パシュトゥー語を覚えてくれる明るい人々であった。

回診を終えると中村医師は手術室へ。ある患者の骨の整形手術だそう。その老人の左足の親指、人差指、中指は既になく、残る薬指、小指は変形し、足の側部にゆがんで張りついているといった感じである。病原菌の侵入によって退化した骨がギザギザになっていて、それが肉を刺激し、炎症を起こし易くしているので、そのギザギザ骨をなめらかに整える手術だそうである。

約1時間後、手術室から出て来た中村医師を待ち受けていたのは外来の患者たちであった。ハンセン病で足の指が変形している四歳ぐらいの少女とそれを気づかう父親。北部山岳部から妹とその赤ん坊を連れて来た大男。それらの患者達が中村医師を頼ってやってくるのだ。

一段落ついて時計を見ると二時半を過ぎていた。診察時間は8時から1時までとなつてはいるのだが、

そういう時間では区切れない程患者の数は多いのである。

患者用サンダルの快適さ

日曜日。回診、外来患者の診察のあと、中村医師はアフガン人ドライバートの運転する三菱パジェロで公営病院へ。この公営病院にもハンセン病棟があり、パキスタン人の医師、看護師はいるのだが、知識も技術も未熟とのことで中村医師に依頼があつたらしい。毎日曜日、此処を訪れ、患者の治療について相談にのつておられる。そして、手術の必要な患者については、ミツシオン病院の方へ移させるようにしているとのことである。

月曜日。今日はカイバル医科大学の医学生15名がやつて来た。医科大学からの依頼により、ハンセン病に関する講義を月二回程、ミツシオン病院で実行しているとのこと。また、保健婦専門学校(の学生達にも、実習を兼ねて、ハンセン病についての指導を実施しておられる。将来、彼らが医師或いは保健婦として仕事をしていく上で、遭遇するであろうハンセン病に対して適切な措置がとれるように、或いはミツシオン病院その他の専門病棟に連絡がとれるようにとの配慮から、学生の受け入れを実施されているようだ。また、早期発見、早期治療という観点からもこのことは重要であろう。

火曜日。現地スタッフに対しての講義、回診、

外来患者の診察と、中村医師は例によって忙しい。私は、病棟内に設置されているサンダル工房で油を売ることになった。3名の職人はいづれも慣れた手つきで、皮を切り抜き、靴底に張りつけ、ミシンをかけている。患者用のサンダルは柔かい材質の靴底を備えている。私ははじめ、旧市街のバザールで買ったサンダルを履いていたが、材質が硬く、足が痛くて仕方がない。ものは試しと、此処の工房で作られたサンダルに替えてみたら、なんと快適なことか。靴底は柔かく、数日履いていると靴が足の形にフィットしてくるようになる。もし、あのまま市販のサンダルを履き続けていたら、私の足の方が、靴の形に変形していたに違いない。サンダル作りの重要性を身をもって体験した次第である。

アフガン人のシャワリ医師

水曜日は10時からペシャワール大学附属のカイバル病院で、木曜日は3時からアフガン・レプロロシー・サービスで、「てんかん」治療に関するセミナーを実施しておられる。受講者は、カイバル病院の神経科の若い医師達5名とアフガン・レプロロシー・サービスのシャワリ医師である。ハンセン病と同じく神経疾患でありながらこれまで治療がおざりにされている「てんかん」についての医療レベルの向上を目指してのことである。脳波計で描かれる脳波データを前にして中村医師が波形

の読み方について説明をする。受講する若い医師達には全く新しい分野のものらしく、修得までには時間がかかりそうである。が、新しいものだけに彼らの知識欲は旺盛で、熱心な討議が繰り返えされていた。

平日の午後は、ペシャワール市郊外のユニバーシティ・タウンにあるアフガン・レプロロシー・サービスの事務所を訪ねておられる。現在、名古屋サウス・ライオンズ・クラブの援助により増築中であるが、難民キャンプ及び北部山岳地帯への巡回診療の基地となっており、最近では、福岡ライオンズ・クラブの寄贈による脳波計を使つての「てんかん」診療も始められている。此処にはアフガン人のシャワリ医師が常駐しており、中村医師のよきカウンタート・パートナーである。シャワリ医師もまた気さくな男であり、戦禍を逃れてアフガニスタンから避難して来た所謂「アフガン難民」の一人であるが、私とは妙に馬が合つて、仲良しになつてしまい、とうとう彼の着ていたジャンパーを帰国の記念に貰つて帰つて来てしまった。難民から物を貰ってくるのは私ぐらいのものだろう。彼は近々日本で医療研修を受ける予定があるとのことと、日本での再会を私も心待ちにしている。

超多忙の中で家族とのひととき

金曜日は手術後の患者の診察を除くと、中村医師の家族サービスの日である。この日は私は同行

しなかつたが、長女秋子ちゃんの通うインター・ナショナル・スクール主催の「風揚げ大会」が行われるとのことで、奥様、長男の健ちゃん、次女的美智ちゃんを伴つて、楽しい一日を過ごされたことだろう。

以上が中村医師の基本的な一週間の活動状況であるが、実際の仕事はこれだけに止まらない。医療器具の購入、手術の準備はまだしも、アフガン・レプロロシー・サービスへの電話設置のために関係局を訪ね廻り、徳洲会病院などから寄贈される医療器具・医薬品の受け出しその他に手間取り、或いは、病棟を訪れる各国医療機関関係者への対応などなど、医療以外の雑用も多く、そのために一日つぶれることもある。風邪をひかれて一日寝ておられたこともあった。

私がかつて二年間、マレーシア滞在中に見て来たアジアよりもかなり厳しい生活環境の中の活動であるだけに相当の御苦労だと思ふ。私の55日間という短か過ぎる期間では、手伝いに行つたといふものの、迷惑をかけることの方が多かったかも知れない。ただ、今後も「何かの灯り」を信じて医療活動を続けられる中村医師を、その現場を少しではあるが知る者として息長く応援していきたい。

ペシャワールでお世話になつたすべての人々に感謝の意を表します。

ペシャワール通信(10)

地の果てから

—ふるさと(下)—

中村 哲

西日本新聞夕刊昭和62年10月3日付より

嫌気覚える少年

病棟での多くのできごと、病棟の偽善的な態度、患者同士の対立、なぐりあい、乞食のような患者の態度、スタッフ同士のいがみあい……感受性の豊かな少年の眼にはこれらのことがどんなに気落ちさせるか、察して余りがある。いつしか様々の不平が、若者にありがちな強い正義感で増幅され、うちとけにくくなっていくのを私は感じていた。自分は乞食ではない。口先で平等と同胞愛を説きながら患者たちを食いものにしてしている人々にたまたま嫌気を覚える、と少年は述べた。

折しも一九八五年頃から、ペシャワール市内でおきた多数の爆破事件は、市民の中にアフガン人——パキスタン人の亀裂を深めさせていった。意を決して、彼はパキスタン北辺のチトラールに赴き、そこで難民として定住しているかも知れぬ親戚を捜してみたようだが、消息はつかめず、この戦乱のさなかに一人で故郷に帰るのは不可能でも

あったので結局ペシャワールに舞い戻ってきたことがあった。

人の気持ちの醜さを

一九八五年十月に彼がチトラールに赴くべく私に許可を求めた時、おそらくこの少年は戻ってこぬかもしれないと思つた。それで、「何か困つたことがあればいつでも戻ってくるように。危険な真似はせず、時を待ち、自立できるように読み書きを覚え、何か手仕事を身につけておくのも方法だ」と私はそれとなく示唆した。「先生がおっしゃりたいことはわかっています」と彼は言つた。

「しかし、それを誰がしてくれるのですか。学校に行け、訓練所に行けと皆は言うが、先生以外に誰も努力をしてくれなかった、アフガン難民の訓練校も、キリスト教会のアフガン人のための英語学校も、どこも僕を受け入れてくれなかった」

これで彼のチトラール行き目的は明らかになつた。彼は余りに多くの人の気持ちの醜さをみす

ぎたのだ。それもよからう、と私は思つた。彼の言うことは事実なのだ。ただ一人前の判断するには彼は若すぎる。夢と希望が自暴自棄に転化して、心がすさんで行かぬよう、逃げ道を作つてやらねばならないと私は考えた。

ベッドは空けておく

「よろしい、行きなさい。しかし、これは退院ではない。外出だ。君のベッドはそのまま空けておく。読み書き、計算の方は俺が今準備中だ。勉強しておくのは、たとえアフガニスタンに帰つても役に立つから」とだけ述べて許可を与えた。

二週間後に彼は戻つてきた。チトラールで彼が何を考え、何を感じたか私は知らない。チトラールは私も何度も行つたことがあるが、人も自然も事実上アフガニスタンの続きであるといつてよい。美しい白雪をいただく巨大なヒンズークシの山なみと、平和な緑のオアシスの村々の光景が、いかに強烈にこの少年の郷愁を呼びおこしたか、私は容易に想像できるのである。土ぼこりと騒音にみちたペシャワールの雑踏が、彼自身の不幸せな体験と重なつていかに異物のように感ぜられたことであろう。

先生も出て行くの？

しかし、ともかく少年はもどつて来た。

「チトラールはどうだったかい？ 楽しんだか

い？」と私がきくと、彼は初めは興奮して、ひとしきりチトラールが自分の故郷に似ていること、チトラールのキャンプでは故郷から来ていると噂をきいた伯父には会えなかったこと、山の中で石小屋に閉じ込められて暮らしているハンセン病患者をみたこと等を、たて続けに話した。だが最後に、ふと声を落として少年は私にきいた。

「先生もあのシスターのように、いつかはここを出てゆくのですか？」

「インシ・アッラー（御意ならば）、いつかはね。しかし、おまえが独りだちするまで俺はここを離れない。ともかく、今はここで手伝いをしていろ。悪いようにはせん」

「心配をかけました、ドクター・サーブ」

「案ずるな。ムサルマーン（回教徒）も、イサーイー（キリスト教徒）も、みんな何かをさがして巡礼しているのさ。結局、メッカは自分の中にあるのさ」

「ドクター・サーブ、長くいて下さい。ありがとうございます」

祈りの時間を告げるアザーンの誦（とく）誦（とく）がモスクから流れてきた。患者たちは西にむかって礼拝を始めた。少年は高く澄んだ秋の青空を仰ぎ、ひと仕事終えて一息ついたようなすがすがしい顔をして自分の部屋に帰っていった。

〔事務局トピックス〕

※福岡鶴城ライオンズより脳波計をご寄贈

昨年十一月福岡鶴城ライオンズクラブ（奥元一司会長）から脳波計一式をご寄贈戴きました。

これによって、現地の「てんかん症」診療に大きな力を発揮しています。

※名古屋サウスライオンズから巡回診療機材、

二月十五日、名古屋サウスライオンズクラブの小川信夫会長、以下六名の代表団がペシャワール

を訪れ、巡回診療車他機材をご寄贈戴きました。医療機能が大きく充実しました。

※西南学院から温かいご支援

当会設立以来ご支援頂いていますが年末年始にかけ、中学校、高校、母の会等、大きく支援の輪を広げていただきました。

◎事務局員現地にて大活躍！

一月十一日から三月五日まで、事務局の福島裕助さんが、D Eの「助っ人」として赴任。病院での手伝い、機材買出し等フロントしました。

◎佐藤事務局長カイバル医科大で講義

同医大附属病院の招きに応じて、神経外科学に

ついて講義。

四月一日から四月十日まで。

◎事務局渡辺九大助手現地学会出席

来る四月二、六日、ラホールで開催されるSSNTD国際学会に出席、中村医師のもとへも訪問。

◎事務局作業所大名へ

会員の松村祐二郎氏のご好意によって空ビルを提供いただいております。一月九日に移転しました。（毎週水曜七時～十時 事務作業）

所在地 中央区大名一丁目十二～十四

（県歯科医師会館隣）

電話 ○九二一七八一―七六八二

※ドクター・シャワリ德州会病院で研修

アルガン・レプロロシー・サービスの医師として中村医師とともに難民のハンセン病治療にあたっているドクター・シャワリが四月十一日から三ヶ月間、福岡徳州会病院で研修を受けます。自らも難民としての苦難にあい、その中で出会った中村医師の働きに動かされて、ハンセン病治療に従事するシャワリ医師の福岡での研修は、今後の中村先生の活動と、中村先生のいう人材育成の大きな核になると期待されます。

皆様ありがとうございました。

会員の皆様からの声

*新年おめでとうございます。No.14を頂きました。本をお作りになること、ぜひと思えます。現地にスタッフを養成するための基金として送金申し上げます。お金の使い方としてこんな素晴らしいことはありません。喜んで！！

神戸市 加藤喜代子

*大学クリスマス献金です。中村哲先生の活動費にくわえてください。

西南学院大学 宗教部

*支援献金として送金させて頂きます。益々のご活躍お祈り致します。

日本基督教会九州中会連合青年会

小倉教会

*皆さんお元気ですか？どんな方々が事務局にいらっしやるのか？お世話になります。

福岡市 樋口博子

*昭和五三年に大牟田労災病院で一緒に働いて以来のつき合いです。いつも医師としての生き方を考えさせられます。

福岡市 疋田光太郎

*主にあって献金します。

下松市 坂本光男・知恵子

*ペシャワール会へのクリスマス献金(おそ

くなりましたが)として一万円お送りします。

福岡市 天神聖書集会

*前略 わずかですが寄附金として送ります。

福岡キリスト教女子青年会

*皆さんの思いが明るく広がって行きますよう頑張ってください。

前原町 荒川利夫

*会の力になるなんて思ってもいませんが、少しでも役に立てるならば、どんなに頑張ってもどうしても不足金が、その時はお知らせ下さい。

宗像郡玄海町 上村洋子

*早く元気になって、よい生活ができるように助けてあげて下さい。(小学五年)

山口県熊毛郡 中井亮一

*新年を迎えて、ますます皆様のご奮闘をお祈り致します。お身体を御大切に。

太宰府市 池田ゆき

*あちこちの募金にに応じているので、あまり、マネーありませんが貧者の一灯です。所得税の減額措置はとられないのですか。

太宰府市 坂口静一

*哲君の壮挙に感激。

福岡市 永末清作

*日頃、会の為に御苦様です。遠くから皆様方のご活躍を感謝申し上げます。

愛知県 野田伊久枝

*新年明けましておめでとうござります。少ない

ですが、役に立てて下さい。

福岡市 宮崎 宏

*中村先生を元気づけることに使ってください。

太宰府市 青木昭子

*頑張ってください。祈っています。

唐津市 水田憲夫

*中村医師ご夫妻、ご家族の上に神さまのお導きが豊かにあり、ご祝福の内にお働きがなされますように毎日祈っております。

熊本市 藤本久子

*益々の御健闘を心から祈念致します。

鹿児島県始良郡 市田佳朗

*いつも会報を通して中村先生の御働きを知ることが出来感謝です。

長崎市 伊藤清子

*私は神経科の病院に勤めていたので、嫌という程、人の不幸を見ました。心の病気は泥沼のようです。ペシャワールの人々は一口には言えないでしょうが、精神的な病気に苦しむ人が多いのではないのでしょうか。

西宮市 小島邦子

*妹(加藤)から会報を送って来たので、中村先生の尊い御活躍を感動をもってよませていただきました。

北九州市 木ノ原豊子

*縁の下の釘一本になれますように……。

北九州市 高尾源太郎

*去る11月に募金のための会報を御送付下さいまして、ありがとうございます。なるべく確実にと心がけて資料と共に働きかけております。

神戸市 加藤喜代子

*中村先生、頑張ってください。

長門市 田仲君子

*熱烈聲援 熱海市 花田光夫

*大変な事業でございます。どうか頑張ってください。神様のお恵みがあります様にお祈り致します。

水田三木雄

恒例ガレッジセール

参加のお知らせ!!

日時 五月一五日(日)一〇時〜一六時

場所 福岡市中央区六本松の護国神社参道

主催 シティ情報ふくおか

当ペシャワール会では、ガレッジセールへの参加が年中行事となっております、今回もにぎやかに参加します。

前回(去年一〇月)には熊本ペシャワール会からも遠路、芋とみかんを手に駆けつけてもらい、おかげ様で一五万円程の売り上げがありました。その中からコンピュータのプリンター

*大名町カトリック教会信者による年末たすけあい街頭募金の一部を送らせて頂きます。

大名町カトリック教会主任司祭

青木 保

*この一年間ご苦勞様でございました。皆様どうぞよい年をお迎えなさいませ。

中央区 熊本サタ

*良いクリスマスが迎えられます様に、僅かですがお仲間入り出来ました事喜んでおります。

横浜市 松木博子

など事務局の備品代等に充てています。

前回はお客さんから「子供服」の希望が多くありましたので、今回は子供服をメインに攻めようと考えています。

どうぞ、子供服など、御家庭で余っているのがございましたら、事務局あて御一報下さい。

子供服に限らず、何でも結構です。ガレッジセールに出せるような品物がありましたら、こちらもどうぞ御一報下さい。

また、事務局の美男美女を見る機会です。お暇でしたら、冷やかしがてら、見に、買いに来て下さい。

美男・美女が皆様を待っています。

会 則

- ①本会の名称をペシャワール会とする。
- ②本会は、J.O.C.Sの「共に生きる」という理想に賛同し、中村哲医師のパキスタン北西辺境州での医療活動を支援し、必要な情宣・募金活動を行うことを目的とする。
- ③本会は、派遣母体であるJ.O.C.Sを通して必要な協力を行うが、思想・信条にとらわれず、「支えあい」の精神で一致して会を運営する。
- ④会員はそれぞれ可能な範囲で、自ら創意工夫して自由なやり方で支援活動を行う。
- ⑤会員は一口年額三、〇〇〇円、学生会員一口一、〇〇〇円、特別会員一口一〇、〇〇〇円以上の年会費を納入する。
- ⑥本会は会誌の発行を、会員は会の拡大に努める。
- ⑦本会は総会に於て若干名の運営委員を選任し会の運営を行う。
- ⑧役員の改選は毎年総会にて行う。
- ⑨毎年一回総会を開き、会計報告および会の運営について審議する。
- ⑩本会の事務局を福岡YMCA
(〒八一〇福岡市中央区天神一丁目10の24 福岡三和ビル4F ☎七八一七四一〇) 内におく。